

大阪大学図書館報

Vol.24 No.4 Mar.1990 (平成3年) 通巻103号

目次

- | | |
|--------------------------|-------|
| ○ホリスとスタック | ○会議 |
| ○平成元年度国立大学図書館間文献複写
実績 | ○お知らせ |
| ○教官著作寄贈図書 | ○日程 |
| | ○人事 |

ホリスとスタック

鬼木 甫

本年1月末から2月にかけて、小生は米国ハーバード大学（以下HU）に出張し、会議の中間で数日の余裕を生じたので、同大学の図書館システム（以下HL）を集中的に利用する機会があった。帰国後、本館報に原稿を依頼されたわけだが、もし、そのことを以前から知っていたら、HU・HLの資料を持って帰れただろうにと思っている。HUは以前に滞在した古巣であり、HLもよく知っているつもりだったが、変わっている点もあり、戸惑うことも多かった。しかし、半日ほどHLを使っているうちに以前の調子を取り戻し、かなり効率的な資料収集ができたと思う。目的は米国情報通信産業に関する記述・統計資料の収集であったが、ここでは資料についてよりもHL自体について述べてみたい。

図書館の良否、使いやすさは、ユーザの立場になるとよく分かるものである。小生は本学の図書館委員を勤めているので、大阪大学図書館（以下OL）の運営については、本来注文を発する立場にはなく、注文を受ける立場にある。しかし本稿では、ユーザの立場からOLがHLから学べる点を記すことにする。OLの欠点も述べることになる。図書館報のような機関誌では、自分の大学の図書館の欠点をあげつらうよりも、その優れた点を強調するのが常識かもしれない。しかし、本稿ではあえてそれを避けたい。読者には小生の意図するところを分かって頂けると思う。

表題にカタカナ語を2つ並べたが、ホリス（HOLIS）とはHLの資料検索システムの略称である。スタック（Stack）は書庫を意味する。HLの本館はワイドナー・ライブラリー（以下WL、あるいは単にワイドナー）と呼ばれ、HU中でも古い重厚な建造物中にある。HLを見学したいと言えば、まずワイドナーに案内されるのが普通であろう。小生の滞在中にも、多くの見学者が来ていた。また、近辺の小中学生の授業の場所（？）にもなっているらしく、ワイドナーの入口や本館の中で、若い先生の説明を聞いている生徒たちにも多数出会った。

1960年代はじめの米国の大統領J. F. ケネディはHUの出身であり、現在ではその名前を冠せた政治学部もできているが、同大統領は在職中何度か母校に戻って演説している。その中にWLに言及した一節があり、「ハーバードをハーバードたらしめているのはワイドナーである。仮にハーバードのプロフェッサーが全員いなくなっても、ワイドナーが残っているかぎりハーバードは生命を保つであろう。しかし、もしワイドナー・ライブラリーが消滅したら、ハーバードはもはや存在しないであろう。」といった趣旨であったと思う。同大統領がテキサス州ダラスで暗殺される数ヵ月前の演説だったと記憶する。

そのワイドナー・ライブラリーは、古めかしい暗い建物であるが、中で異彩を放っているのがホリス用の検索端末である。WLの中には、階段上のスペースにも、参考書室の机の上にも、検索用カード室の片隅にも、地下室の書庫の中にも、ホリス端末が「散在」している。それだけでなく、同キャンパスの支部図書館（ランチ・ライブラリー、以下BL。全体で30くらいはある。BL用の地図ができています。もちろん、小生はその全部を知っているわけではなく、以前に滞在した時を含めて10ヵ所ぐらいを知っているだけであるが）にも多数のホリス端末が設置されている。この端末を使って、資料を探し出すのである。WLでもBLでも、5～6台の端末が1ヵ所にまとまって置かれていることが多く、その中で、1～2台程度は誰かが使っているが、一杯になることはあまりない。この端末を使って目的とする資料を効率的に検索する作業は、小生にとって新しい経験であった。OLにも検索用端末があるが、端末数や検索の便利さにおいて比較にならない。大阪大学（以下OU）に懸案のキャンパス・ネットワークが設置されれば、ホリス級の検索サービスを提供する条件の一部が整うことになる。

ホリス端末は予備知識がなくても使えるようにできている。型通りに書物の著者名・発行者名・発行年・タイトル・サブジェクト（件名）などから資料が検索できる。使い勝手は非常によく、何でもいからとにかく見当をつけてタイプし、様子を見ろという乱暴な使い方ができる。100件や200件の資料は瞬時に取り出し、好むとなれば画面に次々と表示させ、あるいは横についているプリンター（おそらく日本製）に打ち出すこともできる。プリンターはそれほど立派ではなく、打ち出す字もかすんでいるが、実用には十分に耐える。スピードもある。ホリスは、とにかく使いやすく、誰が使っても壊れたり端末が止まったりすることがなく、大量の資料を短時間にさばくことができる、など実用に徹したシステムである。小生は、最初少し抵抗があったが、一度この端末に慣れると再びカード検索に戻る気はしなくなり、滞在中ずっとホリスのお世話になりっぱなしであった。

もちろん、コンピュータ端末を使っても自分の求める資料がすぐに見つかるわけではない。ホリスは、前述のようにさまざまなキーワードから資料を検索できるが、一般のデータベースのように検索した資料を整理する能力はあまりない（小生の使い方が不十分であったためかもしれない）。

たとえば、小生の研究テーマである「電気通信（Telecommunication）」というサブジェクトで検索すると、何千件もの資料が出てくる。もちろん、そんな多くのもを見るわけにはいかないから、その中から選択しなければならない。次に「電気通信」と「経済学」（Telecommunication and Economics）というサブジェクトで検索すると、数百件というように減ってくる。それを画面で見ることにより、タイトルや発行主体からおおよそ自分のほしい情報が含まれていそうなものを選び出せる。それをプリンターで打ち出し、その後実際に資料に当たるのである。

ところが途中で気がついて、単数のTelecommunicationでなく複数のTelecommunicationsを使って検索してみた。すると、単数のキーワードで出てくる資料と複数のsをつ

けたキーワードで出てくる資料とは、一部オーバーラップしているものの、同じではないことに気がついた。単数でひいて複数のTelecommunicationsというタイトルを持つ書物が出てくるし、また逆のこともある。この場合、単数と複数でそれほど意味は変わらないから、細かい検索のやり方によってカバーする資料が違っていることになる。おそらく、資料に当初キーワードをつけるときに、単数・複数、あるいはその両者無原則に選び、不統一が生じたのであろう。この例でもわかるように、ホリスは全体として使いやすく頑丈にできているが、「論理的」には雑なところが多い。潔癖なコンピュータ・サイエンティストには我慢のならないシステムかもしれない。しかし、よく考えてみると、どんな場合でも所詮資料は不完全にしか集まらないものである。この世の中に存在する資料をすべて集めることはおよそ不可能であるし、そのような試みは不経済でもある。HLの資料を全部集めても、一部しか集まらなくても、その意味では大したちがいはない。われわれは手近な資料から少しずつ学び、そこから自分の考えを作り、仕事を進めていく。ホリスが不完全であるからといって、気にするには当たらない。大切なのは使いやすさであり、検索システムを使うことによって効率が上がればそれでよい。しばらくホリスとつき合っているうちにこのように「達観」し、容易に集められるものだけ集めるつもりで仕事を進めていった。アメリカ式プラグマティズムは、ホリスの作り方にも現れているように思う。

さて、役に立ちそうな資料を一応プリントアウトすると、次には実際に資料に当たることになる。ホリスはワイドナーだけでなく、HLの全BLの資料を打ち出してくるから、小生がチェックした資料の中には、1マイル以上離れているBLの分も混じっている。3～4日の期間でそんなところまで足をのばすわけにはいかないから、残念ながらワイドナーとその近辺のBLだけで満足せざるを得ない。ところで、資料を見るためにそのリストを再度並べ替え、各BL別に、かつ分類順に打ち出すことができれば、リストに沿って順に本棚から資料を出すことができ便利だが、ホリスはそんな器用なことではできない。リストは、ホリスの検索順（たとえば著者名のアルファベット順）に並べられているだけである。したがって当方では、カラーペンテルでも使って各BLで資料が便利に見られるように用意する必要がある。

資料を見るには、それぞれの図書館の書庫に入る必要がある。書庫のことを米国の大学図書館ではスタックと言う。スタック（Stack）とは、一般に積み重ねられたものを意味する。日本語の「書庫」のもたらしイメージは、内部に広い空間をもつ入れ物・スペースであり、積み重ねを意味するスタックとはだいぶ違う。これが、書物収納の効率との関係で重大な意味をもっている点については後に述べる。

スタック（書庫）に入る資格をスタック・プリビレッジと言う。図書館全体を使用する資格をライブラリー・プリビレッジ、書物を借り出す資格をローン・プリビレッジと呼ぶ。HLでは図書館の使用資格が細かく区別されており、建物内に入って開架書架の書物を見るだけの資格、書庫に入る資格、書物を館外に借り出す資格などがある。小生にとって最も重要なのは、書庫にはいる資格であった。多数の資料をカウンターを通していちいち借りていたのでは、役に立つ部分をさがしてコピーする仕事など何週間もかかってしまう。幸い、知合いの教授の紹介状でスタック・プリビレッジを入手することができた。

書庫（スタック）は、ワイドナーに隣接しているが、それとは区別された領域になっており、入口でスタック・プリビレッジを示すカードを提示して中に入ることができる。

ご存知の方も多いであろうが、米国の図書分類は日本式の十進分類と異なり、LC分類（Library of Congress Classification：米国国会図書館分類）と言われるアルファベット式のものを使っている。社会科学書の分類記号はHではじまり、工学はTである。書物は

スタック中で型のごとく分類順に並べられており、目的とする書物を探し出すことはスタック内の地理を少し調べれば難しいことではない。OLの書庫と原理的には同一である。(しかし後に述べるように、スペースの使用効率では大差がある。)小生はホリスで印刷した資料リストを手スタック中を行きつ戻りつし、書棚から本を引き出しては内容をざっと調べ、役に立ちそうなページだけをコピーする作業を繰り返した。

コピー機であるが、スタックの要所にコイン式のコピー機が置いてある。1枚5セント(6.5円)である。また紙幣・コインの両替機もあり、1ドル紙幣を入れると硬貨が出てきて、コピー機に使える。10ドル、20ドル紙幣はカウンターで1ドルに両替してくれる。コピー機はかなり多忙であり、少し長くコピーを続けていると、たちまち誰かの視線を背中に感ずることになる。その時は使用をしばらく譲り、近くのデスクでコピーするべきページを選び出す作業を行う。

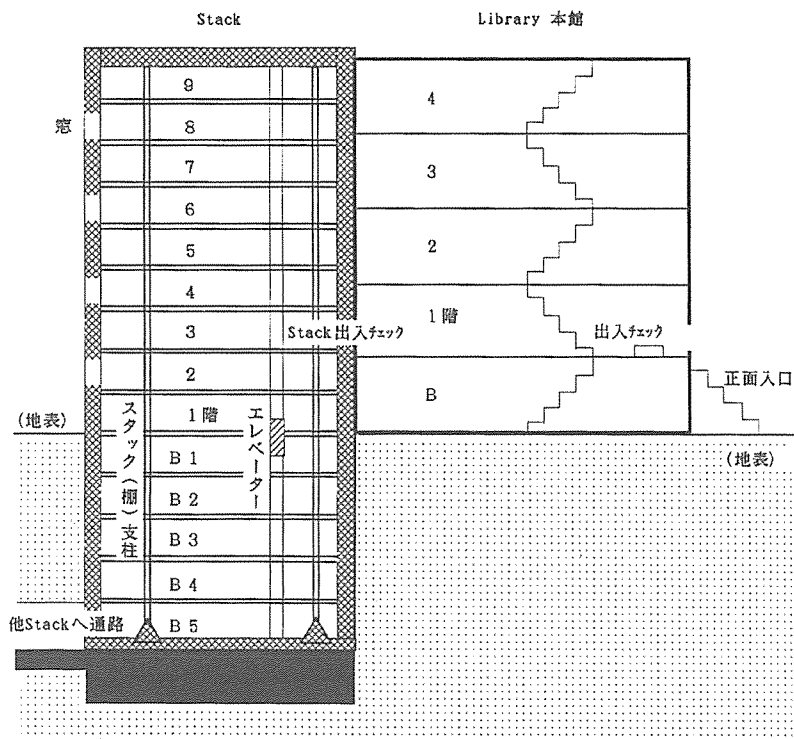
スタック中にコピー機が多数配置されていたおかげで、資料調べ(コピー)の仕事が能率的にできた。コピー機(日本製ではなかった)は不格好であるがよくできており、何よりもコピーのスピードが早い。コピーボタンを押すと、1秒ほどで閃光を発し、0コマ何秒かのうちにコピーが終わる。少しぐらい被写体が動いてもコピーイメージは損なわれない。写真のシャッターのようなものである。したがって、コピーボタンを押してコピーが終わるまでの時間が短い。仕上がりは日本製の富士ゼロックスやキャノンのようにきれいではないが、実用には耐える。結局、短時間のうちに多数のコピーを取ることができる。また、小生が数日間滞在し大量のコピーをとった間、コピー機の紙がなくなって作業が中断したことは一度もなかった。用紙を大量にストックしているのであろう。ただし、用紙サイズは8.5インチのレターサイズと11インチのリーガル・サイズの2通りに限られていた。図書館内の随所に置かれた多数のコイン式コピー機と紙幣の両替機は、一見大したことはないようだが、研究者の研究能率を大幅に高めており、OLでも採用してもらいたいシステムである。

スタックに長時間入っているうちに気がついたことが1、2ある。まず第一に、棚から本を取り出した後の処置である。HLでは(米国の大学図書館ではどこでも同じであろうが)、取り出した書物をユーザが元の本棚に戻すことを禁止しており、“Please do not reshelve”の表示がいたるところにある。取り出した書物は、空いている棚に横に寝かせておくか、あるいは近くの机の上などに置くことになっている。コピー機の横には、コピーの済んだ書物を置くための大きな机が備えられている。ユーザによる戻しを禁止する理由は簡単である。図書館の素人であるユーザが書物を元に戻せば、誤った場所に入れ込む可能性が大きい。一旦書物が誤った場所に埋もれてしまえば、それを探し出す手間は大変なものである。多くの場合行方不明になってしまう。それが度重なると、行方不明の書物が大量に出ることになり、図書館の利用価値が落ちてしまう。これを避けるために、ユーザが一旦棚から取り出した書物は元に戻さず、棚の書物と混同されない形(立てないで横に寝かす形)でそのまま残すようにしている。後に掛りの人が集めて分類順に並べ直し、ワゴンで運びながら正しい位置に戻すのである。スタックの中には、取り出された書物を再整理するための作業場所があちこちに作られている。これほど、書物を正しい位置に戻すことに気を使っているのである。

ところで、OL本館書庫では、取り出した書物の処置に関し明瞭な指示は出ていないと思う。取り出した書物を置くための棚・机なども用意されていない。書物を元に戻せという指示も、元に戻すことを禁止する指示のいずれも出ていないと思う。したがって、OL書庫では、取り出した書物はユーザ自身が注意深く元に戻すことを想定しているであろう。その結果はどのようになっているのであろうか。一度調査・検討して頂きたいものである。

書物を元に戻す仕事は学生アルバイトによっている。米国の大学では、キャンパスのいたるところで学生が働いており、学生の姿を見ない作業は室内清掃（ジャンター作業）ぐらいのものである。講義・セミナーの助手、問題練習のアドバイス、宿題の採点、学内の警備や消防・救急、食堂・売店のカウンター、樹木・芝生の手入れにいたるまで多くの学生が学内で働いており、ライブラリーも例外でない。スタック内の書物の戻し掛だけでなく、カウンターには貸出掛の学生がいる。小生がスタック・プリビレッジを受けたデスクの担当者（彼は教授のサイン入りのメモとHUのスタッフ・リストを見比べて、小生にスタック・プリビレッジを発行した）も、見たところ学生のものであった。このように学生（学部学生を含む）を適当にトレーニングし、大学の運営システムに組み込むことによって、大学も便宜を受け、学生も手近なアルバイト先を与えられ、かつ大学運営への参加意識を持つことにもなっている。OUでは学生を大学業務に従事させることは稀であり、OLでも小生は学生アルバイトの世話になった経験はない。「もし学生が貸出カウンターに立てば、書物の紛失が多くなってしまう（失礼!）」との反応が返ってくるのかもしれないが、必ずしもそうではないと思う。無責任な学生も少しはいるかもしれないが、大部分の学生には書物の貸出や書棚への戻しなどの仕事を任せられることができると思う。話によると、隣接の大阪外国語大学では、学生が図書館で働いているとのことである。OLのように手不足で困っているところは、学生パワーを活用し、活性化を図ることを考えてよいのではないだろうか。

スタックについては参考になると思うので、構造の概略を図に描いておいた。一覧して頂きたい。図からわかるように、ライブラリー本館と「書庫」であるスタックとは別の構造物である。両者はスタック出入口だけで連絡している。OL本館・書庫から連想できるのはワイドナー本館だけであり、スタックの構造はまったく異なっている。



スタックは外側をコンクリートで囲まれた巨大な書物収蔵スペース中にある。大きなビルの各階の床を全部取り払った巨大な空間に、これも巨大な書棚を入れて、書棚間に通路を設けたものを想像して頂きたい。図では、チェック模様の部分がコンクリートの外壁部分であり、中に1、2あるいはB1、B2等と記した部分が書物用の棚を載せ、また人が歩くためのスタックである。本館のエレベーターには1階、2階(Floor 1, Floor 2)と表示されているが、スタックの「階」はStack 1, Stack 2と呼ばれている。スタック部分は、鉄製の棚が地下5「階」から地上9「階」まで積み重ねられている(スタックされている)。内部は、書物用棚と人間の通路に分かれており、一見したところではわれわれの知っている書庫と同じである。また、図から分かるように、本館の1階分の高さでスタック1「階」分の高さとはまったく異なっている。スタックの1「階」分の高さは、人間の背丈よりもわずかに高いだけで、手をのばせば上の「階」のスタックに手が届くほどである。本館の4階がスタックの9階に当たるという具合である。

本館の閲覧室は、開架式の本棚を置き、人間が本を読むための場所であり、天井の高さ、採光・遮音など居住性を高める工夫がなされている。これに対し、スタックは、なるべく多くの書物を収納し、かつそれを最も取り出しやすい状態に置くことに徹した構造物である。気分よく書物を読むための場所ではない。スタックの床は、金網式に上下が透けて見えるところもあり、上下間で話ができる。自分の頭上1mのところまで学生が運動靴が動いているという経験も珍しくない。スタックの「床」の重量、そしてその上の書棚・書物の重量はすべて多数の細い鉄柱で支えられており、最基部には、図のように巨大な重量を支える基礎がつくられているはずである。スタック中には、建物外壁と天井を支える梁・柱以外に大きな構造物・柱はない。また、図にあるように、スタック中を小型のエレベーターが走っている。このようなスタック構造は、図書館の書物収納場所としては極めて合理的に設計されており、なによりもその収納キャパシティの大きさを評価できる。

OLの書庫と米国式のスタックとを比較したとき、大体の感じでは、スタックの方が単位体積当たり3倍程度の書物を収納できる。また、棚の高さが低く、すべての書物が手をのばせば届く範囲に並べられているので、取り出しやすさもスタック方式が優れている。読者はOLの書庫に入られた際に、もし書庫の柱や床・天井をすべて取払い、書棚と通路だけでスペースを満たしたときどれだけ書物の収納量がふえるか見当をつけてみて頂きたい。

OLでは現有書庫の収納スペースの不足が問題になっており、近い将来の書庫増築が計画されているようである。現在のOL書庫は、スタック式ではなく、図のライブラリー本館様式の部屋の中に書棚を入れた形になっている。言い換えれば、人間のために居住性を旨としてつくられたスペースに本棚をそのまま持ち込んだ形になっている。これが不合理であることは、居住性を高めるための広いスペースと書物の重量を支える床・柱の機能が矛盾する点や、広い窓の設置と書物の保存のための夏の湿気防止との矛盾などに見ることができる。わが国の図書館では、米国式のスタック方式を採用しているものはごく少数であると思われるが、これらの点を考えて検討をお願いしたいものである。

なお、わが国では図書収納スペースの不足を補うために「電動式書架」という代物が幅をきかせている(実は小生の研究所にもある)。電動式書架では、数列の書棚のうち一時に1カ所だけしか使えない。一人が本をさがしている間、他の人は待っていなければならない。それは、書物を使用するためのものでなく、死蔵するためのものである。スペースを効率的に使うためには、スタック方式がはるかに優れている。HLではもちろん電動式書架のようなものは見なかった。スタック方式の書庫はすでに数十年来米国で使用されているのに、まだわが国に導入されていないのは何故であろうか。

スタックの中には、閲覧用の机が多数配置されている(これはOLでも同じである)。スタック内の机が窓の近くにあることは稀である。もちろん地下室部分では日光から遮断されている。それは環境を気にせず作業に没頭する研究者のためのものである。棚から取り出された書物の一時置場にもなっている。スタック中の閲覧机を使うには、デスク・プリビリッジを受ける。通常は、自分の専門分野の書物が集められている棚の近くの机を使用するのである。デスクにはデスク・プリビリッジを持っている人の名前が示されている。デスクが空いている時には、誰でもそれを使用できるが、デスクの使用主がくれれば立たなければならない。デスク・プリビリッジの持主は、書棚の本を一時的に自分のデスク上に占有することができる。ただし、2日以上(Over Night) 続けて自分の机に置き続けるためには、カウンターまで行ってその旨を登録し、登録証を書物に挟んでおかなければならない。登録された書物以外の書物は、どこにあらうと、掛員が定期的に巡回し、ワゴンに集めて棚に収納することになる。小生が訪問した時期は、学年前期と後期の中間であったためか、スタックで仕事をしている人数は比較的少なかった。それでも、音を立てて歩いていると、突如仕事をしている人の横に出て恐縮することがあった。デスク・プリビリッジの使用者の大部分は大学院学生であり、プリビリッジは修士・博士論文を書いている学生に優先的に与えられる。

なお、かつてワイドナー本館の横にピューシー(Pusey)という名の小さなBLがあった。今回知って驚いたことであるが、何年か前にピューシーの地下を大幅に掘り広げて新たにスタックをつくり、隣の本館ワイドナーのスタックと地下5階の通路で連絡させ、ピューシー・スタックとワイドナー・スタックを地下で一体的に運用するようになっていた。社会科学関係の書物は相当数ワイドナーからピューシー・スタックへ移動させられていた。HUでは、すでにキャンパスが狭くなっており、新しい書庫を建てる余裕がないので、地下に延ばしたとのことである。実は、ワイドナーでは地上の建物容量よりも地下容量の方が大きく、スタックの相当部分が地下に潜っている。キャンパスに建物が乱立するのを防ぐための処置だが、地下スタックは、安全性や保温性(省エネ)の点でも優れている。(HUの所在するマサチューセッツ州ケンブリッジ市の気候は札幌相当であろう。)しかし巨大な地下スタックをつくるための費用は莫大であったと思われる。OLも改築・増築話が進んでいるが、このように地下・半地下のスペースを活用する方策は考えられないものであろうか。

HLを使って最も印象に残ったのは「ホルス」と「スタック」であった。しかし、この他にも、OLとの差を感じさせる点が多かった。むしろその差があまりに大きいことにつづく嘆息したと言うべきであろう。両者の歴史の差や、予算額の差からやむを得ない点もあるだろうが、それだけでなく図書館運用システムの合理性、メンテナンスと改良の努力・意気込みなどについて、格差の存在を否定できない。率直に言って、虚心にHLや他図書館に学べば、OLは現在よりはるかに使いやすい図書館になることができると思う。

以下は暴論と取られるかもしれないが、小生の忌憚ない感想を記して本稿を終わりたい。今回HLでの作業を終わった後に、日米間のサービス貿易を主題とする会議に出席する機会があった。その席で米国の学者が「アメリカは製造工業分野で日本に立ち遅れてしまった。技術面でも工程面でも、われわれは多くの分野で日本に遠く及ばない。しかしサービス分野では、米国の優位は依然保たれており、リードを拡げている分野もある。その最たるものがHigher Education(大学・大学院教育)である。われわれは、高等教育サービスを日本に輸出することができる。日本はアメリカの大学・大学院教育サービスを受け入れるための制度改革に努めるべきである。」と発言していた。OLの現状を思い浮かべながらHLを使って作業した直後の小生には、この発言はショックであった。小生の知るだけでも、米国とわが国の高等教育の差は大きい。

本学の多くの方はすでに心配しておられるのではないかと思うが、国立大学の地盤沈下がささやかれ始めてすでに数年になる。小生は10年後のわが国の国立大学機構が、かつての国鉄や現在のソ連社会主義帝国のようなことにならなければ幸いであると考えている。図書館は大学教育・研究のための中枢である。自発的に学ぶ者だけが学ぶことができるという点から考えると、大学教育は講義の良否よりも図書館の良否によって左右されるかもしれない（前述のケネディ演説をも想起されたい）。現在の本学図書館は、大学教育・研究の中枢であるにもかかわらず、予算的には学内で継子扱いになっており、活性化のための措置もごく部分的にしかなされていない。遠慮なく言わせてもらえば、OLは昭和40年代の水準で足踏みしている。過去20年間にわが国の他セクターや外国が大きく発展したため、相対的に取りのこされてしまったのである。思い切った措置、たとえば図書館予算の大幅増額、図書館機構の強化とメリット・システム（信賞必罰）の導入、ユーザ（学生を含む）の声の取入れ、さらに国内出張・海外出張予算の相当部分を図書館に回し、外に学んで改良策を探るための措置をとる、などは非現実的な提案であろうか。

（おにき はじめ 社会経済研究所教授）

平成元年度国立大学図書館間文献複写実績

平成元年度（元年4月～2年3月）における各国立大学（95校）・短期大学（1校）・高等専門学校（54校）・総合研究大学院大学（1校）の図書館間で受付処理された複写データの処理件数は213,987件であった。

図1は各年度の処理件数の推移をグラフにしたものである。また、外国雑誌センター館の平成元年度の受付処理件数は52,597件であった。これは全体の24.6%にあたる。表1にその内訳を示した。

図2は、複写の依頼件数と受付件数とを累積グラフにしたものである。依頼・受付件数の多い順に足していった。全受付件数の50%が11校に集中していることがわかる。

図3は依頼件数と受付件数との関係を国立大学95校について示したものである。

図4と表2・表3は依頼・受付件数を地区別にグラフ及び表にしたものと各地区の大学等の数をまとめたものである。

表1 外国雑誌センター館 複写受付件数（平成元年度）

館名	系列	件数
東北大学附属図書館医学分館	医学・生物学系	3,963
大阪大学附属図書館中之島分館	医学・生物学系	14,930
九州大学附属図書館医学分館	医学・生物学系	7,401
東京工業大学附属図書館・同長津田分館	理工学系	13,288
京都大学附属図書館	理工学系	5,008
東京大学農学部図書館	農学系	3,529
鹿児島大学附属図書館	農学系	2,107
一橋大学附属図書館	人文・社会科学系	1,851
神戸大学附属図書館人文・社会科学系図書館	人文・社会科学系	520
合計		52,597

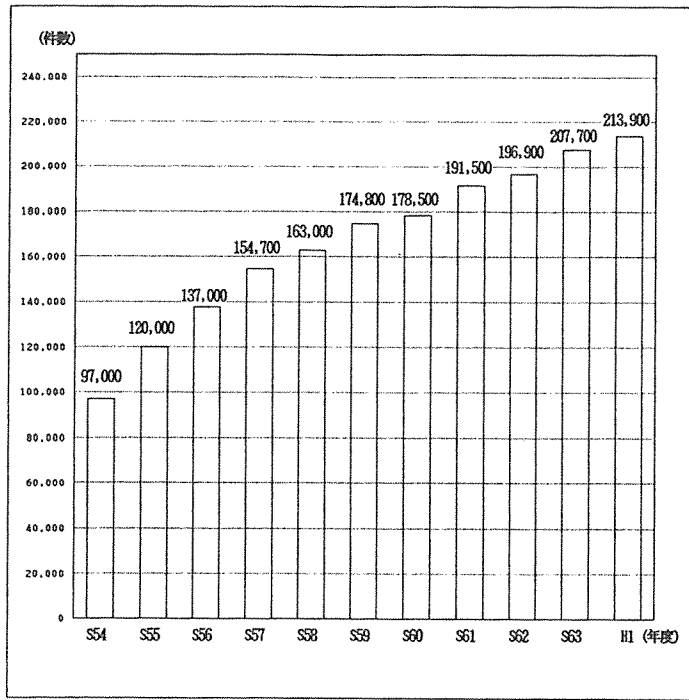


図1 国立大学図書館間文献複写実績（昭和54年度～平成元年度）

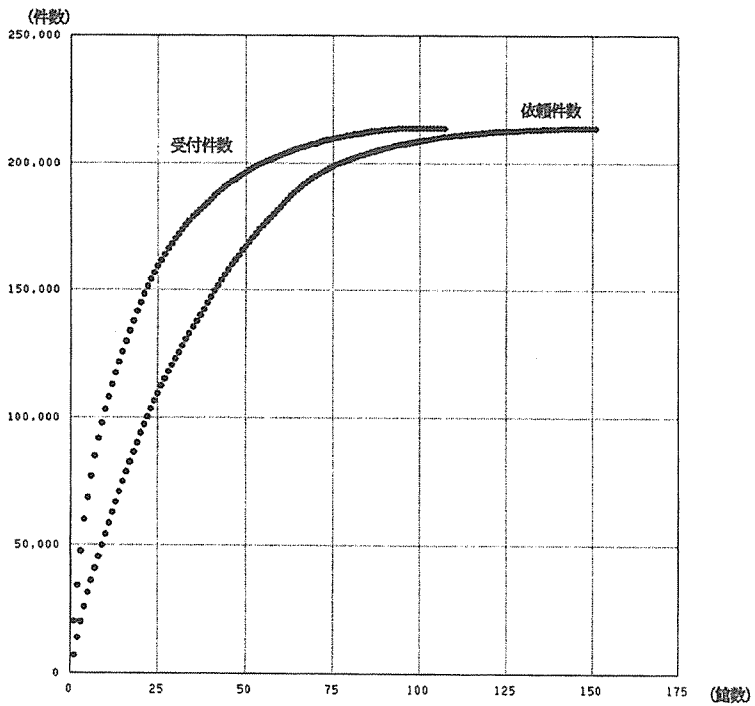


図2 依頼・受付件数累積（平成元年度）

依頼件数

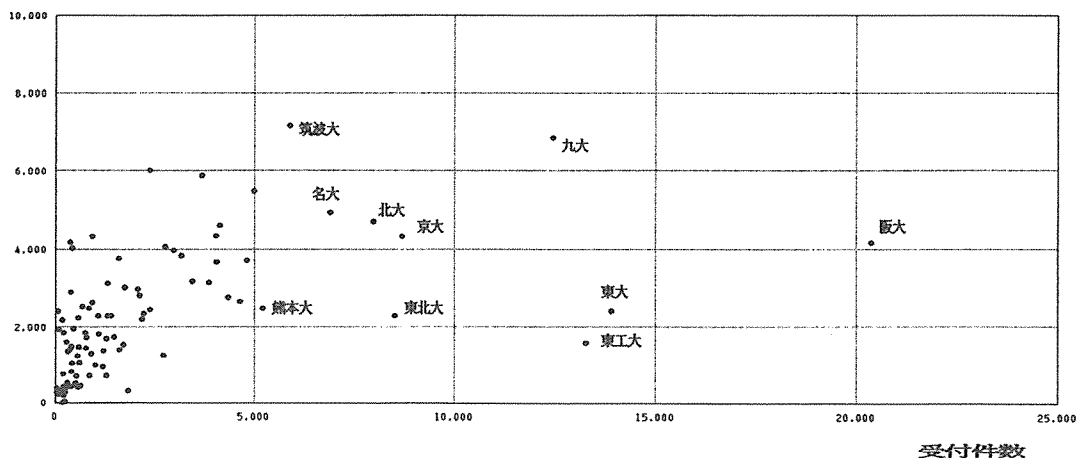


図3 依頼・受付件数（平成元年度）国立大学95校

表2 地区別依頼・受付件数（平成元年度）

		北海道	東北	関東	東京	北信越	東海	近畿	中国国	九州	合計
北海道	依頼	4,565	1,869	666	2,082	475	420	1,495	461	431	12,464
	受付	4,565	1,920	837	357	739	691	865	720	591	11,285
東北	依頼	1,920	5,853	1,300	2,600	907	421	1,191	382	300	14,874
	受付	1,869	5,853	1,944	792	1,579	705	840	1,004	1,259	15,845
関東	依頼	837	1,944	6,059	6,948	2,269	1,505	2,872	806	745	23,985
	受付	666	1,300	6,059	2,409	2,124	1,374	815	1,234	970	16,951
東京	依頼	357	792	2,409	5,117	486	775	1,857	462	490	12,745
	受付	2,082	2,600	6,948	5,117	3,060	3,709	3,426	3,312	3410	33,664
北信越	依頼	739	1,579	2,124	3,060	7,569	2,606	3,237	1,104	772	22,790
	受付	475	907	2,269	486	7,569	2,785	1,188	1,658	1,344	18,681
東海	依頼	691	705	1,374	3,709	2,785	7,117	4,294	1,257	853	22,785
	受付	420	421	1,505	775	2,606	7,117	1,910	1,730	1,035	17,519
近畿	依頼	664	740	702	3,275	994	1,760	8,606	2,006	1,178	19,925
	受付	1,491	1,188	2,846	1,843	3,193	4,220	8,606	8,099	5,932	37,418
中国国	依頼	921	1,104	1,347	3,463	1,852	1,880	8,099	19,746	5,340	43,752
	受付	465	385	832	476	1,148	1,331	2,006	19,746	6,284	32,673
九州	依頼	591	1,259	970	3,410	1,344	1,035	6,030	6,186	19,842	40,667
	受付	431	300	745	490	772	853	1,356	5,162	19,842	29,951

依頼・受付件数合計 213,987件

表3 地区別大学等数

	大学	短大	高専	院
北海道	7		4	
東北	7		7	
関東	10		4	1
東京	12		1	1
北信越	9	1	6	
東海	8		4	2
近畿	14		5	1
中国・四国	13		14	
九州	15		9	
合計	95	1	54	5

*総合研究大学院は4地区に分散している

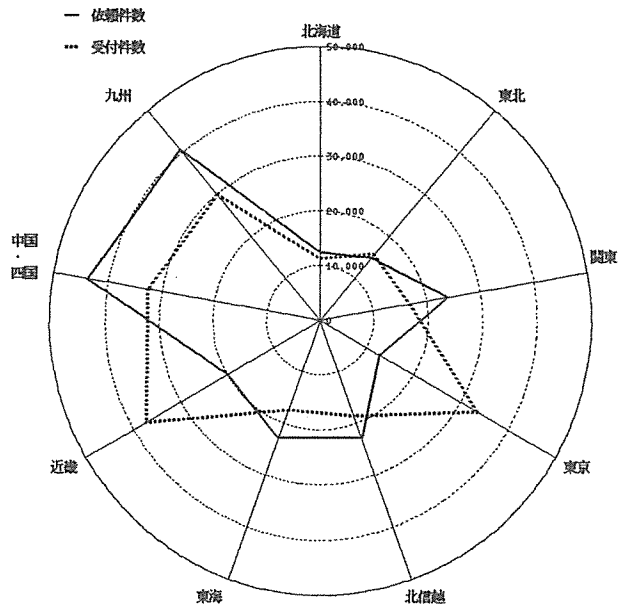


図4 地区別依頼・受付件数 (平成元年度)

教官著作寄贈図書

一本館

廣田 鋼蔵 (理・名誉教授)

満鉄の終焉とその後

廣田 鋼蔵

(青玄社 1990)

高木 俊夫 (蛋白研・教授)

ポリアクリルアミドゲル電気泳動法

高木 俊夫

(廣川書店 1990)

山賀 禮一 (歯・名誉教授)

堺市文化財調査概要報告 第5冊

山賀 禮一 (4章3節分担任執筆)

(堺市教育委員会 1990)

宮本 健作 (人科・教授)

母と子の絆

宮本 健作

(中央公論社 1990)

中之島分館

微生物病研究所細菌血清学部門

腸炎ビブリオ 第三集

三輪谷 俊夫・大橋 誠監修

竹田 美文・工藤 泰雄・篠田 純男

・本田 武司編集

(近代出版 平成2年11月 1990)

吹田分館

橋本 初次郎 (工・名誉教授)

Some papers of professor Hatsujiro Hashimoto.

H. Hashimoto

(1989)

末石 富太郎 (工・教授)

都市にいつまで住めるか: 地球環境時代の

都市づくり (読売科学選書 30)

末石 富太郎著

(読売新聞社 1990)

Proceedings of the fifth International Conference on Urban Storm Drainage, vol. 1-3.

Edited by Yoshiaki Iwasa, Tomitaro Sueishi

(Local Organizing Committee of the 5th International Conference on Urban Storm Drainage 1990)

高城 敏美 (工・教授)

火炎の分光学的計測とその応用：フレームスペクトロスコープ (日本分光学会測定法シリーズ 20)

幸田 清一郎他編、高城 敏美執筆 (学会出版センター 1990)

白藤 純嗣 (工・教授)

半導体工学(情報・電子入門シリーズ 8)

白藤 純嗣著

(共立出版 1990)

赤木 新介 (工・教授)

設計エキスパートシステムの基礎と応用

赤木 新介、藤田 喜久雄共著

(コロナ社 1990)

荒田 吉明 (溶接研・名誉教授)

セラミックス溶射と応用

荒田 吉明著

(日刊工業新聞社 1990)

鈴木 計夫 (工・教授)

プレストレスト鉄筋コンクリート構造と設計例

鈴木 計夫著

(鹿島出版会 1990)

足立 吟也 (工・教授)

新無機材料科学

足立 吟也他共編

(化学同人 1990)

村井 真二 (工・教授)

有機化合物命名の手びき：IUPAC有機化学命名法A, B, Cの部

小川 雅彌、村井 真二監修

(化学同人 1990)

平木 昭夫 (工・教授)

Formation of Semiconductor Interfaces

Edited by A. Hiraki, A. Kawazu, I. Ohdomari

(North-Holland 1989)

紙野 桂人 (工・教授)

人間都市論

紙野 桂人著

(学芸出版社 1990)

埴 輝雄 (工・名誉教授)

実用真空技術総覧：Technology of Vacuum

実用真空技術総覧編集委員会編

埴 輝雄編集委員長

(産業技術サービスセンター 1990)

鳴海 邦碩 (工・助教授)

都市デザインの手法：魅力あるまちづくりへの展開

鳴海 邦碩他共編

(学芸出版社 1990)

前田 肇 (工・助教授)

アドバンスト制御のためのシステム制御理論(システム制御情報ライブラリー3)

前田 肇、杉江 俊治共著

(朝倉書店 1990)

一柳 正和 (工・助手)

統計力学概説

David Chandler著 一柳 正和、

小倉 淑共訳

(オーム社 1990)

裏 克己(工・教授)

LSIはこうして生まれる：電子顕微鏡で
観るLSIの世界

裏 克己、藤岡 弘共著
(日刊工業新聞社 1990)

東 孝光(工・教授)

設計者と語る都市型住宅の設計手法

東 孝光編
(彰国社 1990)

榎木 亨(工・教授)

土木へのアプローチ 第2版

榎木 亨他共編著
(技報堂出版 1991)

—基礎工学部図書室—

井口 征士(基礎工・教授)

三次元画像計測

井口 征士、佐藤 宏介共著
(昭晃堂 1990)

会 議

中之島分館運営委員会

生命科学図書館WG会合〔合同会議〕

3.2.18(月)14:30~17:00(中之島分館会議室)

協議事項：1. 次期分館長の選出について。中之島分館長選考規程にもとづく選考の結果、鈴木不二男歯学部教授が再選された。(運営委員会単独議事、以下は合同会議) 2. 生命科学図書館委員会規程・館長選考規程について。細部調整を経て次回決定することとした。 3. 平成3年度前半の吹田地区利用者サービスについて。原案を一部修正して実施することとした。 4. 構成部局校費支弁による文献複写料金の見直しについて。原案どおり承認された。 5. 平成4年度歳出概算要求事項について。原案どおり承認された。 6. 生命科学図書館学外者利用要項について。原案を中之島分館で試行する一方、生命科学図書館の発足に向けて継続して検討することとした。

吹田地区運営委員会

3.2.27(水)14:00~14:45(吹田分館会議室)

協議事項：1. 次期分館長の選任について。次期分館長の選考を規程及び申し合わせにもとづいて行った結果、笠井暢民分館長を再選した。

豊中地区運営委員会

3.3.5(火)14:30~15:50(附属図書館会議室)

報告事項：1. いちょう祭について。情報サービス課長から、「いちょう祭」の展示内容について説明があった。

協議事項：1. 平成3年度基本参考図書について。情報管理課長から、基本参考図書購入計画案について説明があり、協議の結果原案どおり承認された。 2. 次期委員長の選出について。投票により、俣野委員(人間科学部)が次期豊中地区運営委員会委員長に選出された。 3. その他。(1). 平成2年度大型コレクションについて。平成2年度大型コレクションの申請の結果について質問があり、情報管理課長から国内図書として黒田重太郎文庫が決定した旨報告があった。(2). 入館チェックについて。高校生、予備校生等の入館制限に対するチェック体制について質問があり、情報サービス課長から、入館チェックシステムの導

入等の具体案を検討している旨の説明があった。(3). 休業期間中の開館時間の延長について。前回の本委員会で報告のあった休業期間中の開館時間の延長の具体案について質問があり、情報サービス課長から、予算面、要員確保の問題、延長時間中の入館チェックの問題等いくつかの問題点があるが、入館チェックシステムができた時点で検討したい旨の説明があった。(4). 開架図書の配架について。開架図書の図書の乱れの改善について質問があり、情報サービス課長から、学生アルバイトの雇用等により改善を図りたいと考えているので、暫く猶予願いたい旨の説明があった。(5). 本委員会の開催回数について。委員長から本委員会の開催回数をもう少し増やしてはどうかとの提案があり、協議の結果、了承された。なお、今回は予算審議時期の前の6月頃に開催されることになった。

分館長会議

3. 3. 12 (火) 14 : 00 ~ 15 : 05 (附属図書館会議室)

報告事項：1 主要行事について。事務部長から、1月30, 31日に開催された国立大学附属図書館事務部長会議について報告があった。2 その他。(1). 就職情報の端末機の設置について。情報管理課長から、学生部からの依頼により標記端末機を本館に設置し、本年4月1日から稼働することになった旨の報告があった。(2). 附属図書館電子計算機システム更新に係る技術審査委員について。情報管理課長から、前回(2. 7. 16開催)の本会議で承認願った標記委員のうち、2名の方が辞退されたが、館長一任となっていた後任の人選について、速水昭宗講師(歯学部)の後任は作田守教授(歯学部)に、横山正明教授(工学部)の後任は荒木俊郎助教授(工学部)に、それぞれ決定した旨報告があった。(3). 生命科学図書館建築の進捗状況について。中之島分館長から、昨年4月20日に始まった生命科学図書館建築工事の進捗状況について報告があった。

協議事項：1 平成3年度図書館事業費予算要求書(案)について。情報管理課長から各項目別に説明があり、協議のうえ、了承された。2. 平成4年度図書館新規概算要求事項(案)について。情報管理課長から、概算要求事項(案)の説明があり、協議のうえ、了承された。3. その他。(1). 分館長の再任について。館長から、鈴木中之島分館長、笠井吹田分館長及び西原薬学部分館長が、それぞれの分館運営委員会で再任された旨報告があった。

■■■■■ お知らせ ■■■■■

電話番号変更について（中之島分館）

中之島地区の電話交換業務の停止にともない、中之島分館の電話番号が下記のとおり変わりますので、お知らせいたします。

記

（変更時期）

平成3年4月1日から、吹田地区移転（平成3年秋予定）まで

（変更後の電話番号）

医学情報課長	(06) 447-7279	
図書館専門員	(06) 443-5535	
図書受入掛	(06) 443-5536	
雑誌情報掛	(06) 443-5537	
資料運用掛	(06) 443-5538	相互貸借窓口
	(06) 441-7167	貸出カウンター（夜間代表）
参考調査掛	(06) 443-5539	

本変更にともない、中之島地区外からの電話連絡は全て上記回線に限定されるため、電話回線の不足が予想されます。

雑誌所蔵等のお問合せには、できるだけファクシミリをご利用ください。また、館内利用者の呼出しは原則としてお断りしますので、ご協力のほどお願い申し上げます。

なお、ファクシミリ番号は以下のとおり変更ありません。

(G4)	962-5900	（学術情報ネットワーク接続）受信用
(G3)	(06) 444-0732	代表番号

■■■■■ 日 程 ■■■■■

- | | | |
|----------|----------------------------|------------|
| 3. 1. 29 | 学術情報センター総合目録小委員会（平成2年度第3回） | （学術情報センター） |
| 3. 1. 29 | 国立大学図書館協議会賞受賞者選考小委員会 | （愛媛大学） |
| 3. 1. 30 | 国立大学附属図書館事務部長会議 | （愛媛大学） |
| 3. 2. 8 | 近畿地区医学図書館協議会例会 | （大阪医科大学） |
| 3. 2. 18 | 中之島分館運営委員会（第91回） | |
| | 生命科学図書館WG会合（第36回）合同会議 | （中之島分館） |
| 3. 2. 25 | 学術情報センター総合目録小委員会（平成2年度第4回） | （学術情報センター） |
| 3. 2. 27 | 吹田地区運営委員会 | （吹田分館会議室） |
| 3. 3. 5 | 豊中地区運営委員会 | （本館会議室） |
| 3. 3. 11 | 国公私立大学図書館協力委員会文献複写委員会 | （関西大学） |
| 3. 3. 12 | 分館長会議 | （本館会議室） |

■■■■■ 人 事 ■■■■■

異動前の所属・職名	氏 名	異 動 内 容	発令年月日
		(採 用)	
事務補佐員 医学情報課 資料運用掛	鎌倉 敦子	事務補佐員 医学情報課 理学情報掛	3. 1. 16
		(辞 職)	
事務補佐員 医学情報課 資料運用掛	西森 豊		3. 3. 15
		(退 職)	
事務補佐員 情報サービス課 参考調査掛	大西 吉之		3. 2. 28
" " 資料運用掛	西村 謙一		"
" " "	岩本光一郎		"
" 吹田分館 "	安田 覚		"
" " "	長棟 恵示		"
" " "	森 敏昭		"
" " "	黒川 寛博		"
" " "	富永 博		"